

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考

吉 田 道 興

はじめに

この数年間、「道元伝」中に含まれる靈瑞・神異譚および民間信仰（神祇を含む）に関わる諸種の伝説に注目し、教団史の視点からその発生と展開について発表してきた。それは、史実とは異なる神秘的な伝説の内容や意味に興味を抱いていたからである。今回は、「道元伝」を軸に、門外漢の身で僭越ながら他宗派の祖師「最澄伝」と「空海伝」を対比しようとするものである。本稿は「祖師信仰」研究に属する。

一 使用テキストについて

【伝教大師最澄伝】 最澄の高弟仁忠（一説、真忠）撰（天長二年）『叡山大師伝』（以下『別伝』と略）は、伝記資料中、最古で委曲を尽くした内容のため昔より重んじられ、以後の伝記の根本資料となっている。次いで智証大師円珍撰の二書『叡山大師略伝』・『伝教大師行業記』になるが、一般にはほとん

ど流布していない。その後、多数成立したが大半は漢文体である。やはり、庶民に親しまれた資料は、江戸期、元禄二年（二六八九）覺深非際撰『伝教大師伝（仮名伝）』（以下『伝教伝』と略）（以上四本は『新版』伝教大師全集『巻五に所収』）と絵図を豊富に盛り込んでいる文久二年（一八六二）法龍編著『伝教大師・弘法大師／両大師利生記』（以下『利生記』と略）上巻に収載する最澄伝であろう。本稿では、主に『別伝』と『伝教伝』『利生記』に注目し、検討していく。

【弘法大師空海伝】「空海伝」の祖典は、承和二年（八三五）伝空海撰『御遺告（二十五カ条）』とされ、伝記の多くはこれより派生しているが、古来より真偽の問題があり、注意を要する。空海の伝記資料は膨大な数にのぼる。守山聖真著『文化史上より見たる弘法大師伝』の解説によれば、その資料は六五〇種に余ると記し、長谷宝秀編『弘法大師伝全集』には、周辺の資料を含めると八五〇種にわたるとされ、他の祖師伝に比べ圧倒的数量である。

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

二

その中、九世紀代成立の三本（『空海僧都伝』『大僧都空海伝』

『贈大僧正空海和上伝』）が重視されるが、十三世紀以降に成立した絵巻物や十六世紀後半の版本がある。梅津次郎氏は、それらの系統を五種に分類している（弘法大師行状絵巻諸本と白鶴美術館蔵本について）『弘法大師伝絵巻』角川書店）。その中から本稿では、文永九年（一二七二）前後成立の『高野大師行状図画（五十話）』六卷（地藏院蔵本、大法輪閣刊）（以下『六卷本』と略）を主に用いたい。これは『御遺告』に沿い、他の絵巻物と比べ後添の靈瑞話が少ない。

【道元禅師伝】「道元伝」では、撰者不詳『元祖孤雲徹通三大尊行状記』（曹洞宗全書史伝上所収）をはじめ、河村孝道編著『諸本対校永平開山道元禅師行状建撕記』（大修館書店）に所収する「古写本建撕記」数本が重要視される。その後、江戸期成立の面山瑞方撰『永平実録』と『訂補建撕記』は研究者によく使用される。一般庶民向けの版本は、面山瑞方訂補・大賢等図会『訂補建撕記図会』や瑞岡珍牛撰『永平道元禅師行状之図』、絵巻物では黄泉無著撰『永平道元禅師行状之図』が「絵解き」として親しまれた。右の書のほかに靈瑞・神異譚が多い撰者不詳『永平開山元禅師行状伝聞記』（以下『伝聞記』と略）（文化二年（一八〇五）刊）がある。しかし、本稿では他の資料を含め、随時ひろく用いたい。

二 三祖師の前半生における靈瑞・神異譚

○家系・出自

《最澄》 最澄（七六七～八二二）の俗姓は、「三津首（みつのおびと）」、先祖は「後漢孝献帝苗裔登萬貴王也」、父は、「百枝」〔『別伝』〕。帰化人の子孫とされ、神護慶雲元年（七六七）八月十八日、江州滋賀郡三津の浦で誕生した〔『伝教伝』〕。

《空海》 空海（七七四～八三五〔通説〕）の父は、「高皇産靈尊の後胤、（神別）讃岐佐伯直田公」〔『大師年譜』（主旨）〕、「其父佐伯の真氏、御母は阿刀の氏」〔『六卷本』〕、「父、佐伯の直田公、母、阿刀氏玉依御前」〔『弘法大師行状絵詞伝』〕。

《道元》 道元（一二〇〇～五三）は「姓源氏（中略）、村上天皇九代之苗裔、後中書王八世之遺胤」〔『三大尊行状記』（以下『行状記』と略）〕、「亜相（久我）通親之季子（中略）、師之母者（藤原）基房公之女」〔『僧譜冠字韻類』と伝えられる〕。

以上、三師は、伝承によるといずれも「貴種」の家系であるが、これは庶民に尊崇される前提条件なのであろうか。

○誕生の祥瑞

《最澄》 両親が日枝山東麓に行き、名香が馥郁とする巖の間、の神祠に参籠し、四日目に夢告（夢感好相）〔『伝教伝』上〕を感得して懐胎。誕生の際、天より色鮮やかな花が降って人家の園が蓮池のようになった。また手に白銀の薬師如来像を

持つて誕生した。さらに誕生後、七日を経て母の懷から東にむかい七足歩み合掌して「捨於清淨土、愍衆故生此、能於此惡世、広説無上道」と法華經の文を誦した。父母は、「権化の再来」と申した〔同上〕。仏菩薩の誕生や説法に生ずる「天華乱墜」の莊嚴、さらに白銀の藥師如来の小像を持ち、また釈尊の降誕を思わせる生後七日目に東に七歩あゆみ、「天上天下、唯我独尊」に代わり『法華經』の一節を誦したと将来の活躍を暗示している。名は「広野」という。

《空海》 父母の夢に天竺から聖人が飛来し母君の懷中に入り懷胎。十二ヶ月を経て誕生。わが子は昔、仏弟子であったので仏弟子にしよう〔『六卷本』誕生奇特事・幼稚遊戲事〕と両親が願った。その際、凡人と異なり「合掌」ないし「金剛合掌して生」じた〔『行狀要集』「或人作讃」〕。名は「真魚」、両親は「貴物」と称す。一般人の懷胎期間と異なり、空海の場合は懷胎十二ヶ月である。『行狀要集』には、この兆瑞は聖人降誕を表し、聖徳太子・不空三藏も同じであったとの主旨を述べる。後掲の道元は、何と「処胎十三月」という。《道元》 相師が見てこの児は常の童とは異なり必ず聖子である「七処平滿、骨相奇秀、眼有重瞳」〔『行狀記』〕とあり、聖人の特相が一致していると説かれる。また懷妊の時、空中に声があり、この児は「五百年來の聖人」である〔同上〕とし、時に白光があり室内を照らした〔『道元和尚行録』〕。さ

らに処胎十三月にして生まれ、その夕、「祥光燭室、異香氤氲」〔『列祖行業記』〕と次第に「瑞兆」が増幅している。

このように、これら三師の誕生伝説は、「釈尊伝」の降誕逸話（託胎・出胎・占相）と驚くほど似ている。

○幼少期の聡明俊秀

《最澄》 四五歳頃、自然に学道を志し、七歳では学問の才智は同列より勝れ、深く仏道を慕い、そのうえに陰陽医方工巧等の技まで通達していた〔『伝教伝』上〕。同種の内容は『別伝』にもある。これは、まさに早熟の天才といえよう。

《空海》 五六歳の頃、夢にいつも八葉の蓮華中に坐し、諸仏と共に語り合い、また常に泥土で仏像をつくり、童堂をたてて仏をまつり、朝夕拜んでいた〔『六卷本』幼稚遊戲事〕とあり、後日の「仏縁」深き事象を裝飾し、造寺・造仏の事業を示唆する。他の子どもと遊んでいる時にも四天王が天蓋を捧げ、その様子を見た勅使が礼拝〔四天王執蓋事〕する。六七歳頃、険しい山に上り、自分がもし仏法を弘め衆生を導くことができなければ、諸仏があつまり命を続かせ給え、そうでなければ我を棄てようと誓って、三度も谷へ身をおどらせたが、その度に天人が身を受け止めた〔誓願捨身事〕と雪山童子の「施身」に匹敵するような逸話があり、にわかに信じがたいが幼児期からの仏天による加護を示す。

十二・三歳頃、外舅阿刀大足に文書を習い、文学の道では

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

四

經史等を学び、十五歳で入洛し直講味酒淨成に随て毛詩左伝尚書を読み、岡田（牛養）博士に左詩〈氏〉春秋を学ぶ〔明敏篤学事〕という天才であった。その後、有名な「能満虚空藏求聞持法」の習得〔聞持受法事〕等が続き、出家前、少年期に修行力や超能力も既に備わっていたことを暗示する。

《道元》 四歳で李嶠百詠、七歳で左伝・毛詩を読み、時に古老名儒からこの児は非凡で大器となるとし「神童」と称された。また九歳で世親の俱舍論を読み、耆年宿徳から「文殊」のようで真の大乘機と嘆じられた〔行状記〕。貴族や豪族階層における教養書の一なのであるうか、「毛詩」「左伝」が空海と同じである点、誠に興味深い。

○出家―沙弥戒・比丘戒・菩薩戒

《最澄》 宝亀九年（『血脈譜』では宝亀十年）、十二歳で近江大安寺行表に随って出家、「最澄」と称す。行表より唯識論等を広く学んだ。天応元年十五歳の時、勅により国分寺の住持最寂の死闕を補い得度〔『伝教伝』上〕。具足戒の時期は「延暦三年（七八四）甲子正月廿日最澄御年十八歳」〔同上〕。歴史的には『戒牒』により「延暦四年四月六日」である。

この間、最澄の父百枝が一子の誕生を祈願した神祠で、最澄が一心に精進懺悔している際に「靈応」があり、香炉の中に「佛舍利」一粒を感じ得し、また暫くして灰の中に金の香合を得た。その大きさは菊花のようであり、すぐに舍利を入れ

ると宛かも旧器のように一致〔同上〕との瑞縁にあう。その地に草庵を結び、後日、神宮寺と称される。

この逸話には当時の「佛舍利信仰」も含んでいると思われる。この「佛舍利」は、後掲の入唐時の暴風波浪、竜王に供養し波浪沈静させた逸話と関係するのであるうか。

《空海》 『聲響指揮』撰述後の二十歳（延暦十二年）、石淵寺勤操大徳に伴われ和泉槇尾山寺にて出家、沙弥戒を受け「教海」、後に「如空」と改め、二十二歳、東大寺戒壇院にて具足戒を受け、「空海」と改称する〔『六卷本』〕。

《道元》 道元は十三歳、建暦二年（一二二二）春、比叡山の山麓、外舅良顕法眼の室に入る。翌年四月九日、座主公円僧正を礼し剃髪、翌十日戒壇院にて菩薩戒を受け比丘となる。

道元が良顕に投じた際、二人の老翁（？）、山王と客人（白山姫神）が示現し、道元は「真の仏子菩薩」であり、愛護せよと命ずる〔『道元和尚行状伝聞記』（以下『伝聞記』と略）〕。これは「山王権現」の神々による加護を表し、曹洞宗の「山王信仰」との接点（瑩山撰『総持寺中興縁起』に鎮守三所権現の「白山」「山王」「行基」を含む）を示す。

○修行習学

《最澄》 延暦四年七月、十九歳で衆生済度の心が深く、世間の無常を觀じ、閑静の地を求め修行しようと思ひ、日枝の山に攀登り千仞の険しい谿を見ると、そこは五百羅漢の精進修

行地であつた。羅漢と問答を交わし、靈鷲山の報土は劫火にも懷れない常寂の嚴土であり、無明がどうして汚せようか。

本願によりてここに住し、心澄み寂靜にして慈氏（弥勒仏）の出世を期すと答え、この日枝（比叡）山の「靈峰」たることを教え、草庵を構えた〔『伝教伝』上〕。比叡山を羅漢在住の靈地と示す点は、後掲の道元伝にある吉祥山永平寺を中国天台山と同じく「羅漢現瑞地」とする逸話に通ずる。

それからさらに一つの峰（東塔東谷、現山上書院）に登ると威嚴肅々たる天童に出逢う。その童子は「定心院の山王」（山の王か）であつた。かくして日夜昏曉、修行に励んでいると、ある時、菴室の北峰辺で昼は紫雲がたなびき、夜は白い光がたち昇っていた。それを確かめ見ると古木が倒伏し、天龍八部が遶り守り、傍に仙人が数十人立ち並んでいた。そこで、この地は賢聖栖心修行の靈窟と知り、その靈木で三体の仏像（薬師如来・釈迦如来・阿弥陀仏）を同形に彫り、「山門三塔の本尊」に定めた〔同上、東塔北谷八部尾の由来〕。

次に延暦七年（七八八）、「根本中堂建立由来」に関する挿話が入る。「鬚しろし翁」（三輪明神）が中堂（一乗止観院）の建立を祝福するために示現。また、ある時、中堂に詣り修法念誦を終え帰途の際、「満土混淪の辻で異相の人（『大黒天』）に逢い、その尊像を彫刻し安置したこと、すなわち天台宗の世間に福祿を与える「大黒天信仰」の由来も記す〔同上〕。

これらは、天台宗による「民間信仰」を受容していく側面を表すものであろう。

延暦廿一年九月十二日 入唐求法の詔を受け、吉野金峰山に参詣し安全帰航の祈願をすると権現の託宣に「三輪明神に祈るべし」とあり、大和三輪明神に参詣すると杉むらの中からあやしく光る三つ玉が飛び出し、たちまち最澄の頭上に住まり、そのまま彼の光が先立ち飛行して東坂本の神祠に留まった。すなわち「日吉山王権現」（大山咋神）と三輪明神（三輪金光）が一体となり比叡山の「鎮守・護法神」となったいきさつを述べる〔同上〕。『利生記』（『伝教大師円宗守護神を勧請し玉ふ之事』）にも、金峰山参詣時の同じ逸話を所載する。ここでは、既に入唐前にも関わらず、その天台宗（『法華経』）の護法神である円宗守護神（山王神）の勧請をしているが、歴史的には後のことであらう。

《空海》「土佐の室戸の埼に留て虚空蔵求聞持の法を修し給に明星口に入り虚空蔵の光明てらし来りて菩薩の威徳をあらはし仏法の無二を現す」（『六卷本』明星入口事）は前掲の『十卷本』（『伏悪龍』）と対を成す逸話である。〔天狗降伏事〕ないし〔魔事品事〕は割愛。

空海の尋求する「不二法門」は大和国高市郡久米の道場、東塔のもとにあるとの「夢告」があり『大毘盧遮那経（大日経）』を発見。その内容の疑問を解くため入唐求法の志を発す〔久

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

六

米寺東塔心柱」。また渡海の無事を祈って白檀薬師如来の像をつくる〔『十卷本』渡海祈願〕と続き、入唐の目的を明確に示す。しかし、その実現は九年後のことになる。

《道元》出家後、比叡山で「天台の宗風と南天の秘教、大小の義理と顕密の奥旨」をすべて習学し、十八歳の内に一切経を二度も看閲、宗家の大事、法門の大綱を学ぶが「本来本性、天然自然身、顕密両宗不出此理」と修行に関わる疑滞を持ち園城寺公胤に参問し、その指示により建仁寺明全に師事。臨済宗黄龍派の十世に列す〔『行状記』〕とある。

建仁寺留錫中、坐禅の際、虚空に声があり、三輪明神（常世の神・国常立尊）が示現し、「道ハ夫レ極リ無シ（中略）務ヨヤ君勿怠ト」と道元を激励している〔『伝聞記』〕。

○留学―入唐・入宋

《最澄》延暦廿三年三月、渡海の無事を祈り、筑紫の宇佐八幡に参詣、大宰府竈門山寺で薬師如来尊像四軀を彫刻安置、諸大乘経を講讃。同年秋七月に船出、暴風波浪時、最澄が一心に三宝帰命し「佛舍利」一粒を海中へ沈めると龍神が納受し風波が沈静、無事に明州に着岸〔『伝教伝』下〕。なお帰朝の際、同種の逸話が『利生記』巻上にある（後述）。

天台山に拝登した最澄は、山容が「神仙の窟宅する所、玄聖の遊化する所」と感涙した。修善寺座主道邃に謁し「一心三観一念三千」の奥旨を得る。佛隴寺行滿に謁し、智者大師

の「懸記（予言）」に示す滅後二百余歳、東方への興隆予言たがわずとして「血脈相承」の奥義を伝授された。その際、智者大師が「法蔵」に鎖をかけ鑑を虚空に投げた。それ以来、閉じられていると謂う。そこで最澄が持参した鑑（根本中堂建立の際、土中より入手した鍵）と「法蔵」の鎖とが見事に一致し開扉、その経論聖教を授与された。山中の僧徒は、これを見て最澄は「智者大師の再誕」と讃嘆〔同上〕。これは「円宗の旨趣体得」を表す。

《空海》延暦廿三年五月、京を出発、七月肥前松浦より出帆〔大師御入唐事〕、八月衡州（福州）に着岸〔入唐着岸事〕。その時、上陸を拒否され、空海が「願書」を作成し觀察使はその妙文に感銘し許可、十二月下旬、無事長安に入城〔入唐入洛事〕。その後、真偽はともかく左右の手足・口に筆をとり同時に書き、また一人の童子（五髻童子）に出会い、流水に詩を書き、「龍」の一字に一点を加えると真龍となった〔五筆和尚号事〕〔虚空書字事〕。これらは空海の能書家「執筆五法」に由来する逸話であろう。また「神童」に導かれ、白馬に乗り靈鷲山へ参詣して釈尊を礼拝、「弘法利生」の教勅を得た〔渡天礼拝釈尊事〕「神驗奇事」。これは『般若心経秘鍵』末尾（奥書）の文に由来する逸話であろうか。

青龍寺の恵果より短期間に「伝法阿闍梨位」の灌頂を受け〔遍照金剛〕名を得て、真言の弘通に尽力することを誓って

いる〔大師御入壇事〕。〔惠果御入滅事〕等は省略。

帰朝の際、明州（寧波）の浜において、おのれの習い修めた法が「秘法相応の地」に達することを懇ろに祈願し三鈷を放擲。後述するように、それが高野山に到達し「大師擲三鈷事」、世に「飛行の三鈷」と称す〔『金剛峰寺建立修行縁起』『御影堂飛行三鈷記』〕。

《道元》貞応二年（一二三三）、明全に随従し入宋。その際、船中にて罹病した時、悪風吹来し船中が震動。道元は一心に観音経を誦むと一葉観音が化現し風波がやむ〔『明州本建搦記』〕。他の「古写本建搦記」類やそれ以後の「道元伝」には、入宋時より帰朝時における同じ内容の記述の方が多い。

また入宋途次、暴風雨で黒島に漂着、体調を崩していると石清水八幡（源氏の氏神）と山代飯成山の姫神（？）が示現し、粥と薬（解毒円）を貰って服用し元気になる〔『伝聞記』〕。また道元が太白山（天童山）へ向かう途中、道に迷い困っていると、木こりに身をやつした「太白星（北斗七星）」（道教神）に導かれ、無事に掛錫できた〔同上〕という。

天童山掛錫中、如浄より伝法（嗣法）後、碧巖録を書写している（と異人（阿育王山の護法神・招宝七郎・大権修理菩薩〔『碧山日録』『明州本建搦記』・白衣神人（白山妙理権現）〔『道元和尚行録』『訂補建搦記』〕が現れ、助筆加勢した。

また行脚中、猛虎に遭遇し拄杖ではね退けた「彈虎拄杖」

逸話〔『碧山日録』等〕、病に罹り神人（稻荷神）が示現し与えられた解毒丸を服し治癒した（道正家伝薬となる）逸話〔『僧譜冠字韻類』〕、日本へ早く帰り「無勝幢」を建てるように促した一童子（韋將軍・韋天將軍）「韋將軍化現」逸話〔『日域曹洞列祖行業記』等〕がある。

三 三祖師の後半生における靈瑞・神異譚

○帰朝後の立教開宗

《最澄》最澄が帰朝時、逆浪に遭い祈念すると一人の童子が化現し、吾は「天台山の鎮守円宗擁護明神」、その称「上は豎の三点に横の一点を加え、下は横の一点に縦の一点を加う（『山王』）（天台教学「三諦即一」の理に叶う）」と名乗ると、すぐに波が静まり無事に着岸〔『山家最要略記』・『三宝補行記』・『利生記』〕「風波の難に逢はせ下ふ時、山王権現出現之事」〕。この逸話は、後述する道元の帰朝時にまつわる神人（招宝七郎）逸話と重なる。

これは、最澄が中国天台山の「玄弼真君（道教の土地神・法華経護法神）」〔『天台山方外志』二〕信仰を将来した伝承を示すものである。その後、円珍が「日吉大社」を整備し、鎌倉中期以降、「神仏習合」と「本地垂迹説」の信仰が進む。

弘仁五年（八一四）、筑紫の宇佐八幡に無事帰朝できたお礼に参詣、白檀の千手観音像を彫刻し奉納、「法華八講」の法

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

「道元伝」の霊瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉 田）

八

会を修すと八幡大菩薩の託宣があり、紫の袈裟一衣・衣一領を授与される（『伝教伝』下）。また賀春の神宮寺で講経した際、神殿上に紫雲がたなびき、人々はその「瑞雲」に驚いた（『同上』）という。この逸話は、『利生記』（八幡大菩薩伝教大師に袈裟衣を施與し玉ふ之事）にもある。

時期は不明であるが、最澄は「山王三聖」に戒を授けている。すなわち大比叡山王には「法宿菩薩」、小比叡山王には「華台菩薩」、比叡山王（田心姫神）には「聖真子菩薩」の法号を与えた（『山家最要略記』・『利生記』上）。ちなみに鎌倉中期の「本地垂迹説」では、大宮権現（大己貴神・大比叡神）は「釈迦如来」、聖真子宮（宇佐八幡）は「阿弥陀如来」、地主権現（大山咋神・小比叡神）は「薬師如来」に当てられる。

興味深いことに『利生記』上巻には、最澄の生前中の霊驗とは別に「没後の利生」として数種の逸話がある。次にそれらを時系列順に整理し列挙してみよう。

円仁（慈覚大師）（七九四～八六四）が入唐の時、数度の夢告があり、最澄が種々の注意・助言・指示・保護等を告命したこと。また貞観八年（八六六）七月、少納言良峰朝臣経世が「伝教大師」贈号の勅書を披読した時、最澄が浄土院の廟中より偈文「諸法從來本来常自寂滅相」を誦す声を聴聞したこと。さらに恵心僧都源信（九四二～一〇一七）が夢告により、最澄から「我が山の教法、今汝に嘱す」との告命をうけたこ

と（『元亨釈書四、恵心僧都伝』）。

享保四年（一七一九）六月四日の夜、湛賢法印が病悩し、「夢想」の中に薄木欄の御衣、紫の御袈裟、左手に水晶の念珠、右手に五鈷を持った最澄が来現し、「金剛瀧山」の観音来現地の瀧河を飛躍し、五如来の道場莊嚴地（浄土）を神遊徘徊し、釈迦牟尼如来の金地七宝莊嚴浄土で『法華経法師功德品』を拝聴。次に阿弥陀仏の浄土で聖衆が最澄を礼拝・供養するのを見る。また観音菩薩の浄土に往詣し厄難厄病悪事諸障碍を免れる「千手四海秘法」を最澄が授法、その後、最澄が雲中より光明を放ち去っていった。八月に目覚めると病が快気した（『伝教大師御夢想靈驗記』）。同書には、その後に「万病符三種」として「千手観世音菩薩四海秘法」「悪業破消之秘文」「三宝荒神祭祀供養法」の項目を掲げている。

また西教寺中興真盛（天台真盛宗開祖。円戒国師・慈摂大師）（一四四三～九五）が最澄の夢告により『往生要集』を授かり戒法と念仏の融合「戒称一致」を唱えたこと、同じく『往生要集』の肝要は総結要行を領知し「衆生利益」のために弘めること、最澄が六ヶ所に安置した石像地藏尊「隱房地藏尊」の出現したこと（『叡山参詣案内記』）を載せている。

真上人（一五五九～一六五九）が日蓮宗より改宗の時、願いがすぐに適わず困っている時、夢中に「伝教大師・慈覚大師・慧心僧都」の三人が示現し慰諭したこと（『禁断義』二）。

ある僧が阿弥陀仏像を背負い山を下り、伊勢一志郡仏心寺に安置、後に修復のため解体すると胎内文書より最澄作と判明。癘病が流行し、弥陀像の前で百万遍の念仏を勤修すると胸から白玉の汗が出て難を免れ、翌年も同様の靈瑞があり、後に「靈汗阿弥陀如来」と称され、最澄の「一刀三礼の懇志」の「靈驗」と信じられている（『法華直談』八）。

《空海》 弘仁元年（八一〇）、河内の聖徳太子廟に参詣して九十六日目、廟前に「光明輪」が現出、その弥陀三尊が日本へ衆生済度のために来たことを伝える（『六卷本』大師参詣御廟事）。弘仁七年、高野山に入り、地主神である高野明神（狩場明神・南山犬飼）の化現に逢い（「高野尋入事」、大小二匹の黒犬（山神の使い）の道案内を得て修禪相応の地と見定め「上表」する（「巡見上表事」）。その後、狩場明神の母・丹生明神（天照大神の妹・丹生都比売）の社に宿泊、「神道の威福」を望むと託宣があり、土地を譲渡され（『六卷本』丹生託宣事）、比叡山の鎮守神（護法神）となることを誓っている。これは比叡開山の例等と同じく山神や周辺住民の同意・信任を得なければ布教できないことを意味する。

以前、中国明州の浜で投擲した三鈷杵を高野山の山林・松の枝に発見、さらに大塔を建てようとして土中より宝剣を発掘、「前仏（仏陀）の遊所、伽藍の旧基」と見究め（「三鈷宝剣事」「大塔建立事」、神仏の加護を確信する。

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

弘仁九年（八一八）、疫病が流行した時、嵯峨天皇が般若心経一卷を紺紙金字で書写、開題を求められた空海は『般若心経秘鍵』を作成し宮中で講讃すると結願の及ばないうちに効験が現われ疫病が消滅した（「秘鍵開題事」「権者自称事」というものの、『心経』の呪力・空海の威神力を示している。それに続いて山階寺（興福寺）守敏僧都との法力争い（「守敏降伏事」と天長元年（八二四）に天下が日照りに遭った際の雨乞いの争いであり、結果的に龍王（善女）を神泉苑に勧請し供祭した空海が国土を助けた（「神泉苑事」「祈雨修法事」と記す。次に大峰山にて『菩提心論』『釈摩訶衍論』を撰述しているが、山岳信仰・修験道の頂点に位置する役行者と時空を越えて親交を深め、時に行者が高野山へも通ってくる（「大峰修行事」とし、その修験道との深い関わりに触れている。

筑紫で老翁柴守長者（稻荷大明神）と遭遇し、王城と仏法擁護（鎮護国家）の約束をした逸話（「稻荷契約事」）がある。この出会いを東寺前に変えたのが「東寺稻荷縁起」である。

弘仁五・六年頃、清涼殿で諸宗の学徒による論議中、空海が「法身説法」し「毘盧遮那仏」（即身成仏）となり行化の実を挙げ、真言瑜伽宗の地位が確立した（「宗論事」という。

承和二年三月に「遺告」、弥勒仏の傍に在ることを伝え、同二十一日結跏趺坐して入定（「入定留身事」、永遠の衆生済度を示す。承和九年七月十五日、外護者嵯峨天皇が崩御し葬

「道元伝」の靈瑞・神異譚と「最澄伝」および「空海伝」との比較考（吉田）

一〇

儀の際、五色の彩雲が生じ、空海が「出定」し茶毘・収骨に携わった〔嵯峨喪礼事〕と記す。

《道元》 帰朝の際、白雲霏霏の中に忽ち神人（龍天・招宝七郎大権修理菩薩）が化現して三寸ほどの白蛇となり、鉢囊に入り永平寺で雲水の護法神となる逸話（『永平開山道元和尚行録』・同上）等がある。日本曹洞宗では、特に修行僧の守護尊として「龍天護法善神、白山妙理権現」の巻物を床の間に掛け大事に保持する。帰朝時に最澄が「山王神」を将来、道元が「招宝七郎」を将来し、いずれも道教神を「護法神」とした点に興味がある。

道元の後半生における靈瑞・神祇記事を次に列挙する。まず興聖寺在住時、布薩（ごと）に神明（不明）が来て「聴戒（受戒）」した。永平寺では龍神が来て「八斎戒」を請い回向に預かった（『伝光録』）。神明・龍神の来訪は、道元への帰依と守護を表す。また寛元二年二月、吉峰寺近くの「天神（天満）宮」に参籠、天神と月夜に梅花をみて「和韻」（永平広録卷十）。寛元四年九月、白山に参詣した時、権現と紅葉に関する詠歌を交わす。『伝聞記』には龍天も白山権現も一体分身であり、インドでは龍天、中国では招宝七郎、日本では白山権現・本地は十一面観世音であり、白山は「三国応化の靈地」という。寛元二年、大仏寺開堂時に龍神が雨降らし、山神が雲を興し、草木が林樹（『伝聞記』）。翌年夏、「上堂」の時、天花乱

墜、茶筌中に入る（同右）。宝治元年正月十五日、「布薩説戒」時、五色の彩雲が方丈正面障子に映る（『古写本建搦記』）。宝治二年四月より十二月まで僧堂の内外で殊勝な異香が漂う（『伝聞記』）。建長三年、山奥より妙音不思議な鐘声が聞こえた（同右）。宝治三年正月一日、「羅漢供養」の際、生羅漢たちが放光し山奥より法会道場に降臨（『古写本建搦記』）等は、いずれも永平寺が靈地であることや瑞兆・吉祥相を表す。

宝治二年一月、鎌倉より永平寺へ帰山の途次、越前湯尾峠で「疫病神」を済度（『伝聞記』）。これは陰陽家の安倍清明に纏わる「清明疱瘡神を封ず」に由来する換骨奪胎話である。

また星井の里で女人の亡霊を救済（亡霊度霊）（『伝聞記』）、同じく永平寺帰着後、越前藤原永平の妻、死して蛇となつていたのを救済（畜生度霊）（『古写本建搦記』・同右）という逸話で江戸期における宗門の民衆教化として「授戒会」の普及に関連する挿話である。

建長五年、入滅の様相は、怡然として坐化（坐禅したまま遷化・坐亡）し、顔貌は生きていようであり、室内に異香が漂い、闇維（火葬）し無数の設利（遺骨）を得た（『道元和尚行録』）と記す。

おわりに

三師に関わる靈瑞・伝説類を概観し、「霊夢（夢告）」関連

話と「神祇」関連話の二つが相当多いことに気がつく。

この種の「夢告（霊夢）」は、有名な明恵の『夢記』、および道元の「霊夢」（大梅法常が開花した梅花を授ける『正法眼蔵』副書）、瑩山の永光寺開創にまつわる「霊夢」（『洞谷記』所収）など中世および近世における人々にとって、ごく当たり前に信じられ受容されていたものと思われる。

つぎに「神祇」関連話中、高野山と比叡山の開創逸話に注目したい。根底には山岳信仰・修験道との関係が密接である。比叡山・高野山、いずれの開創にも外護者となる有力者や土地に根ざしていた信仰を無視できなかったのである。

道元の永平寺開創時に「神祇」との関わりを示す逸話はないが、永平寺周辺・北陸一帯には白山信仰があり、次第に白山明神と竜天（招宝七郎大権修理菩薩）の信仰が顕著となる。曹洞宗の本格的「神祇」の受容は、瑩山以降といえよう。

道元は、山神鬼神等に帰依することを否定（『正法眼蔵』帰依三宝巻）するが、一方「出家修道せば諸天よろこびまもるべし、龍神うやまい保護すべし。諸仏の仏眼、あきらかに証明し、随喜しましたさん」（『同右』出家功德巻）とか、「誠に仏道に志しあらば（中略）、切に思う心ふかければ、必ず方便も出来様もあるべし。是天地善神の冥加も有て、必ず成るなり」（『正法眼蔵髓聞記』第二）と述べている。これらは、人の出家・修行に切なるものがあれば自然と「仏天の功德・

加護」があることを強調したものと解釈できよう。

さらに「民間信仰」に通ずる素朴な祈願関連の挿話として最澄・空海・道元三師それぞれの安全渡航の祈願には、薬師如来や観音菩薩および仏舍利への各信仰が行われていたことが窺える。

一般に荒唐無稽と思われるがちな霊瑞として、最澄の天台山滞在中、行満から智者大師以来、開かずの「法蔵」の扉が最澄の持参した鑑（鍵）と鎖（錠）が一致し開扉して経論聖經を得た逸話、空海が明州（寧波）の浜で投擲した三鈷が高野山を開く際、松の枝に掛かっていた「飛行の三鈷」により密教弘法の相応地と定めた逸話がある。時空を超越した神奇・奇瑞の典型である。どちらも後世に創作されたものではあるが、天台真言両宗の設立や旨趣を伝える深い宗教的眞実が含まれている。「祖師伝」類には、この種の凡慮の及ばぬ不思議な効験が多い。

先に聖徳太子伝の霊瑞を考察した。今後は、法然・親鸞・日蓮・一遍の各祖師伝について、同様の視点から霊瑞類の類型や法則性およびその意味するものを探っていきたい。

〈キーワード〉 祖師信仰、霊瑞、神祇、道元伝、最澄伝、空海伝、民間信仰

（愛知学院大学教授）